

# 「陳光甫の経営哲学」

郎 琅氏

亜細亜大学大学院アジア・国際経営戦略研究科

現代、異文化摩擦の対応や急激な社会変容に従って、様々な企業の不祥事が社会問題化するにつれ、経営哲学が改めて注目されるようになった。企業規模、所在地は様々であるが、高い社会的評価を受けている企業と経営者はそれぞれ独自の哲学・思想を持っている。経営は利潤を追求するだけではない、企業のグローバル化への対応、社会的責任の実現、国際経営を達成するための企業家の論理・理念を問う「経営哲学」を制定する重要性が益々高まっている。

経営哲学の概念は研究者や実務家の解釈に応じて、まだ多義的に使われている。だが、一般的に経営哲学について言及すると、経営者の経営思想、経営理念、組織文化、企業の存在意義、企業の行動指導原理などのキーワードが浮かぶであろう。本研究では、企業の経営理念、価値、原則など明文化したものを含めて、企業家の経営活動における判断基準と外部の利害関係者に対する約束を共に求める経営実践思想というものを経営哲学の定義にする。従って、研究主体は企業家である。

企業家の経営哲学研究では、企業家自身の成長経歴と経

営思想形成などを分析するだけでなく、外部環境を扱うべきだと考える。従って、当時社会の工業化の歴史的特質、政治・経済体制背景、固有な文化及び国際関係の立体システムを関連させて、企業家の「経営哲学」とその実践性を分析する価値があると思う。

本研究は、その議論の背景下で、中国近代企業制度が展開した民国時代の代表的な企業家陳光甫の経営哲学とその浸透について究明したい。民国時代は、自由市場経済と自由民主化が大きく発展していたため、専門経営者が増え、西洋の技術・科学管理・文化理念などを導入し、経営者の国際的開放性があった。当時の企業家達は、西洋思想や技術を広く国民に伝え、新しい経営理念を提唱し、社会に大きな影響を与えた。陳光甫はその中の優れている企業家の一人であった。陳光甫は民国時代の代表的な企業家、銀行家、外交家である。陳光甫の経営哲学についての分析を通じて、当時中国企業家がどのようにチャンス把握するか、どのように企業の危機を乗り越えるのか、利潤と社会的な貢献をどのようにバランスをとるかなどをある程度に理解できると考える。